



## グディニャ NNW 国際映画祭 2022 に参加して

浅野 由美子

コロナ禍3年、御多分に洩れず映画祭も、中止やオンライン開催に追い込まれました。もちろん移動も激しく制限され、国内はもとより海外に至っては世界中鎖国状態でしたが、やっと移動が可能になりポーランド開催の映画祭に出席してきました。

NNW国際映画祭は今年14回目となる比較的新しい映画祭です。開催地は首都ワルシャワから北西へ約370km、バルト海に面した港町グディニャです。隣町グダニスクは東欧を民主化へと導いた労働組合「連帯」発祥の地です。NNWはポーランド語“Niepokorni, Niezlomni, Wyklęci”の略で、訳すと「反抗、不動、孤独」となり、抵抗の歴史に焦点を当てたドキュメンタリー中心の映画祭です。

この映画祭は、映画館・劇場・美術館・野外舞台・書店・カフェ・バー・公園等がギュッと集中した一角で、更に仮設建造物や野外スクリーンも設置されて、朝から夜遅くまで8カ所ほどで同時に上映や催し・展示が4日間にわたり行われていました。すべてがポーランド語表記のため、映画上映という事象以外は何が行われているのか謎のままだったのは残念でした。

### 『八十五年ぶりの帰還』上映

映画祭2日目9月29日の18時から上映されました。応募時の条件は「英語字幕が付いていること」で、藤野知明監督作品は新作の長編が3本あるにもかかわらず、字幕を付ける時間的余裕もなく、まあダメ元でことで唯一英語字幕のある短編『八十五年ぶりの帰還～アイヌ遺骨 杵臼コタンへ』(2017)を提出したという情けない理由でした。

上映は全作品ポーランド語だとは聞いていたし、英語テキストも送ったし、当然ポーランド語字幕が入るのだとばかり思い込んでいたら、なんと！ 英語字幕と元々のアイヌ語・日本語音声映像に被せて聴こえてきたのは、男声のナレーション。セリフも文字説明もひとりの男性が語り続けているのにはビックリ！これって手抜きなのか？！と呆然としていたのですが、宿のテレビで外国語映画やTVドラマをつらつら眺めていてわかったことは、元の音声を残してナレー



映画祭ロゴ、公式プログラムと関係者タゲ



NNW国際映画祭会場(一角)

ターが自国語を被せるのがポーランドスタイルのようでした。25分の単独上映だったので、そのぶんたっぷり観客と監督との質疑応答の時間を持ってました。

### ファイナル・ガラ

最終日10月1日夕方6時より、ファイナル・ガラが始まりました。『八十五年ぶりの…』が上映された会場と同じでしたが、一歩中に入ると見間違ふほど華やかな設えに変身していました。照明・調度・たくさんのテレビカメラ、そして着飾ったり普段着だったりの来賓や関係者で溢れかえっていました。各賞を発表し、受賞者がスピーチし、主催者の挨拶なんかで1時間もあれば終わるだろうと予測していたのが、ショパン曲のピアノ演奏から、各賞発表の合間合間にロマン派ばりの詩の朗読や、「連帯」運動のときからの英雄ロックスターの熱唱に、ウクライナ人歌手やアレコレの豪華絢爛なショーも繰り広げられ、その特別な催しは3時間にも及んだのです。

ガラ終了後は、ロビーにて用意されていたワインと軽いつまみで深夜まで交流会がありました。でもそれは翌日聞いた話。私たちは少々交流してから疲労困憊で早々に退散。宿に戻ってからポーランドにたくさんあるコンビニで、蛙という意味の“ジャプカ”で購入したカップ麺の遅い夕食を済ませました。

### すぐ隣の戦争

『八十五年ぶりの…』は国際ドキュメンタリー映画コンペ部門だったのですが、受賞したのはウクライナの作品でした。ガラのプログラムに会場全員が立ち上がってウクライナ国旗を掲げるというパフォーマンスもありました。ロシアとも国境を接しているポーランドにとって、あの戦争は目と鼻の先の出来事なのだと実感しました。

国境を接するポーランドへは避難民全体の約4割の500万人(北海道人口と同等)が身を寄せていた時があり、ポーランド政府は巨額の国家予算を割いて避難民を支援しているといえます。そのため今年は文化・芸術に対する補助金が減っているとのこと。それでも様々な企画や場所での文化に支援し大切に行っているお国柄だとよく分かりました。翻って日本のお寒い文化支援事情に深い溜め息が出てしまいました。(あさの・ゆみこ、映像制作・版画家、会員)